



子規・漱石2人の俳句の魅力を語りあう

句あわせ in 日暮里

無料

日暮里サニーホール JR日暮里駅 徒歩1分

(荒川区東日暮里5丁目50-5 ホテルラングウッド4F)

観覧者募集:200人(申込順)

令和元年12月19日(木)

◆ 第2回 子規・漱石 句あわせ in 日暮里 ◆

午後6時~午後7時30分 (開場 午後5時30分)

第1部 子規・漱石 句あわせ

第2部 俳人による鼎談

子規チーム《東大俳句会》と漱石チーム《早稲田大学俳句研究会》の両チームが、それぞれ子規・漱石の俳句を鑑賞し、ディベートにて熱戦を繰り広げ、俳句の魅力を伝えます。

「子規・漱石から俳句の未来へⅡ」
子規、漱石ゆかりの3名の俳人が、ゆかりの地・日暮里で俳句の魅力を語り合います。

出演者

刈馬 康子 氏 (現代俳句協会副会長、「麦」会長、「天為」最高顧問)
岸本 尚毅 氏 (「天為」「秀」同人)
神野 紗希 氏 (現代俳句協会青年部長)
東大俳句会、早稲田大学俳句研究会のみなさん

申込

11月11日(月曜日)から12月18日(水曜日)まで
来所・電話・荒川区ホームページで申込み
電話:03-3802-3111(内線2521) ※受付時間 平日8:30~17:15まで
ホームページ: <https://www.city.arakawa.tokyo.jp/arapura/geijutu/haikubunkashinko/>
氏名・住所・電話番号をお知らせください。※中高大学生の場合は学校名・学年も

HPからの
申込はこちら↓



日暮里と正岡子規 夏目漱石のゆかり

正岡子規は、明治27年（当時26歳）に上根岸町82番地（新聞記者・評論家の陸羯南宅の東隣、現在の台東区根岸2丁目「子規庵」）に居を移しました。そして、近隣の日暮里や三河島といった荒川のまちを散策し、そこで目にした三河島菜などの俳句を詠みました。子規と親交の深かった夏目漱石もたびたび子規庵を訪れ、句会に参加しました。

荒川区・芋坂の羽二重団子は、子規や漱石に愛され、彼らの作品にもしばしば登場します。右の句は、団子と月を詠んだ子規の句です。また、漱石の小説「吾輩は猫である」の中にも羽二重団子が登場します。

子規が通った「共立学校」は、後の開成高校（荒川区西日暮里）であり、その縁もあり、開成高校の俳句部は、毎夏、松山市で開催される俳句甲子園の優勝常連校です。また、子規が高浜虚子に後継者となることを断られた茶屋でのエピソードは開成高校がある道灌山を舞台としており「道灌山事件」と呼ばれています。

このように、正岡子規、夏目漱石と荒川区はとても縁があるのです。

芋坂も
団子も
ゆかりも
か月の
かなの



俳句のまちあらかわ

荒川区は古くから俳句にゆかりのあるまちで、子規の他にも多くの俳人たちが俳句を詠みました。日暮里は江戸時代、「日ぐらしの里」と呼ばれた風光明媚な花見や虫聴きの名所であり、小林一茶も本行寺をたびたび訪れ、句を詠みました。本行寺には、一茶の「陽炎や道灌どのの物見塚」、また、種田山頭火の「ほつと月がある東京に来てみる」といった句碑があります。

一方、日光街道の千住宿（荒川区南千住）は、松尾芭蕉「おくのほそ道」矢立初めの地です。

「行く春や鳥啼き魚の目は泪」・・・この句を矢立初めの句として芭蕉は旅立ちました。

このように、俳句ゆかりの地である荒川区は、平成27年3月に「俳句のまちあらかわ」を宣言し、投句からイベントまで様々な俳句文化振興の事業を行っています。

正岡子規生誕の地「俳都松山」

愛媛県松山市は、正岡子規や高浜虚子、石田波郷など多くの俳人を輩出した「俳都」として知られています。平成26年8月には、俳句を楽しみ尽くす好奇心をエネルギーとした子規の革新精神を受け継ぎ、松山から俳句の風を絶やさず起こし続けることを宣言した「俳都松山宣言」を発表しました。

市内には、子規記念博物館や坂の上の雲ミュージアムなどの文学施設をはじめ、数多くの句碑や文学遺跡があり、昨年で50周年を迎えた「俳都松山俳句ポスト」や、高校生による俳句の全国大会「俳句甲子



▲俳句甲子園全国大会のようす

園」を開催するなど、まちの至るところで俳句の風を感じることができます。

皆さんもぜひ、正岡子規生誕の地「俳都松山」へお越しください。

